

基礎科学と研究の自由を考える

速 水 格（地質学教室）

五十を過ぎると小学校や中学時代の友人達にも多少の時間的余裕ができてきたらしく、クラス会などの呼びかけがよくかかる。そんな時、「大学で化石の研究をしている」と言うと、「趣味と職業が一致していて幸せだね」とうらやましがられる。しかし、「化石の研究はどんな役に立つのかね」という質問も出る。化石の研究が地層の時代決定や対比を通して地下資源の開発に大きな役割を果たしているのは周知の通りである。しかし、私の研究しているのは、あるグループの生物がどんな過程をたどって進化してきたかとか、太古の海で古生物がどんな生活を営んでいたかといった問題であって、それが解明されたからといって人類社会に直ちに効用が出てくるとは思えない。昆虫採集に熱中している子供の知識欲と大して変りはないかも知れない。そこでこのような質問に対しては無理なこじつけをすることは止めて、「真理の探求は究極的に社会の発展に役立つ」という自分なりの“理学的信念”をもち出すことにしている。

おそらく基礎科学の研究者の多くは同様に目先の効用など考えずに研究を進めていることであろう。また、このような“直接役に立たない学問”を新たに志さず若者が減っているわけでもない。どうやら“学問の効用”と“学問の魅力”とは別の問題であるらしい。歴史的に見れば、当初は社会に何の効用ももたらさなかったささやかな基礎研究が大きな人類社会の発展（改善とは限らないかも知れないが）の出发点となった例が無数にある。また、このような期

待があればこそ、大学での研究の自由が保障されてきたのではなかろうか。

ところが、大学紛争と石油ショック以後、何かが狂い始めた。国の緊縮財政に伴う予算・人員の削減は、我国に限ったことではないにしても、研究者にとって堪え難いことである。基礎科学の研究を進める者にとって更に気になるのは、“科学の緊急性”が問われるようになってきたことである。確かにガン研究を含む遺伝子工学、電子工学、地震予知研究、海洋開発のように直ちに大きな効用が期待される分野があり、国策としてこれらに集中的な投資が行われる事情は理解できる。しかし、すべての研究に“緊急性”が問われ、それによって研究の重要度が推しはかられ、優先順位が決められるようになっては困るのである。この風潮が進むと政治が学問に優先し、実質的に研究の自由が阻害されることになるからである。どのような研究が長期的に見て社会に大きな効用をもたらすかは必ずしも予測できないことであるし、多くの基礎科学分野において研究は時勢と関係なく常に緊急である。

このような状況にあって、小まわりのきく研究者は時流に乗った研究グループに加わって自らの基礎研究の費用を得ることもできよう。しかし、産学共同などにおよそ無縁なピュアリタンは「武士は食わねど……」で、じっと堪える他はない。研究の原動力はもちろん物質面よりも研究心にあるが、昨今のように教室予算の50%近くが光熱費と維持費に消えてしまうのでは、

がまんも限界に近づいていると言わざるをえない。

私の勤務する教室では多くの研究者にとってフィールド調査は欠かすことのできない研究の前提であるが、この6～7年に交通費・宿泊費は約2倍になったのに対して旅費の枠は全くの据置きである。科研費は採択されれば有難いが、平均して数年に1回程度であるから長期を要する研究はこま切れとなり、交付の時期が遅いのでフィールドシーズンに間に合わないことも多い。最近では教官の研究や学会出席の旅費はおろか、学生のフィールド調査の指導さえ満足に行えない状況が生じている。

新任早々にこんな泣き言めいた話になって誠に恐縮である。現在大学がかかえる難問は、入試、キャンパス、学問の現状にそぐわない縦割

りの研究教育体制など多岐にわたっているが、いつの間にか窮地に追いこまれている零細な基礎科学分野を今後どのように盛り立てるかについても抜本的な方策を考える時期に来ている。幸い理学は以前から最も自由に研究が行なわれてきた分野で、困難な状況にあっても研究室の活気は決して失われていないように感ずるが、我々研究者は研究の自由を享受するだけでなく、これを守り真に社会に役立つ可能性をもつ創造を行なう責任があろう。クラス会である旧友が「目先の効用を考える研究は民間でもできる。大学では時勢にとらわれない基礎的な研究をやってもらいたい」と言った。「全くその通り。君は実によく判ってくれているよ」と言って別れたが、多くの人に聞いて貰いたい発言であった。